

研究会・シンポジウム報告

2016年7月19日(火) 定例研究会報告

テーマ： タイ、ラオス、ベトナムの農村部と少数民族

報告者： 米坂 浩昭 (アイ・シー・ネット(株))

時間： 16:30-18:30

場所： 専修大学生田分館5階 社会科学研究所 会議室

参加者数：18名

報告内容概略：

夏季実態調査の事前学習として、現地情報に精通した報告者を迎え、調査渡航先の中から特にラオスを取り上げ日系企業進出の可能性についての知見を得た。投資環境上の利点と欠点の分析を中心に、農村や少数民族がおかれた状況にも触れながら話が進められた。

まず、ラオスに進出している日系企業の概要として、大手企業だけでなく中小企業もあり多業種に渡ること、注目すべき事業形態としては、製造業で最も労働集約的な工程をラオスで生産していること、特にタイ・プラスワンによりラオスの経済特区への日系企業の進出が促進されたことなどが挙げられた。

ラオスの投資環境をどう見るかについて、利点としては、労働コストが安価な上、人々は温和でタイ語を理解できる点、タイやASEANの市場にアクセスできる点、その他にも、土地や電力が安価で豊富である点などがある。

もう一方でラオスの投資環境上の欠点としては、人口規模が小さく、労働力の質の問題、内陸国であるがゆえの輸送コスト高の問題、インフラストラクチャーの未整備などが指摘された。

こうした投資環境を踏まえて、労働力人口の規模と質・消費市場規模・輸送コストなどの問題を克服する道筋についての提案が示された。経済開発から取り残されてきた少数民族をどの様に取り込むかも鍵となるとされる。

最後に、日本側にとってラオスは小国ながら国際政治経済上重要であること、またラオスにとっても日本企業に対する期待が大きいことなどから、双方にとっての将来性が見込めるとして締めくくられた。

記：専修大学経済学部・飯沼健子